

拳神祭 2012「第 23 回全日本新空手道選手権大会」 レポート

(日時：2012 年 6 月 3 日 (日) 会場：東京・新宿 FACE)

去る 6 月 3 日、東京・新宿 FACE に於いて、第 23 回全日本新空手道連盟選手権大会〈拳神祭〉が開催された。新空手の特徴は、グローブを着用することにより顔面攻撃を認めつつも、「腰上 8 本」と呼ばれる、試合時間中に腰より上への蹴り数を規定することにより、パンチのみの攻防になることを防ぐとともに、蹴りの技術研鑽を規則的に目指していることにある。こうしたルールには、新空手初代代表・神村榮一創師の「打倒、ムエタイ」と「一步前へ出る勇氣」という技術と理念が籠められている。また過去 200 回を超える大会からは、多くのプロで活躍する選手を輩出、佐藤孝也、鈴木秀明、増田博正、武田幸三、石川直生、山本優弥を始め、近年では城戸康裕、寺戸伸近、瀧谷渉太、ト部弘嵩などがプロのリングで活躍している。

昨年より二代目新空手代表となった久保坂左近代表は、この理念と方向性を忠実に受け継ぐと同時に、「激しくも、参加者が楽しめる大会運営」を目指し、昨年には東京・白金台に新空手本部・KSS 健生館東京本部を開いたのを始め、K-1 甲子園やプロキック団体・Krush、ホーストカップへも積極的に選手・審判の協力を進め、新空手の普及に努めている。また昨年と今年は今日本の舞台を新宿・FACE のリングに変え、これまで以上にアマからプロへの道筋を明確化させ、今大会では新たにこれまでの K-2、K-3、K-4 の名称を一新、G-2、G-3、G-4 と改め、いよいよ新体制での新生・新空手の姿が見えてきた感がある。

また試合のインターバルを利用して演武やエキシビションを開催、今大会では掘啓&田尻祐介、山本優弥&寺戸伸近による迫力あるエキシビションが行われている。

今大会には 3 月に東京、大阪の二都市で行われた予選大会を勝ち抜いた選手が登場、G-4 から G-2 までの各クラスで熱い戦いを繰り広げた。ここでは各クラスの模様をダイジェストでお伝えしたい。

<G-4 小学生部>

G-4 は小学生向けに防具を着用し、手技での顔面を禁じたルールである。試合のポイントは、蹴りの強打が顔面に入ると技ありとなるため、互いにこの上段蹴りのビックポイントを如何に入れるか、防ぐかとなる。小学1年生部で酒井亮太（極真館マレーシア）が開始と同時に上段前蹴りと上段左回し蹴りで合わせ一本勝ちで優勝。小学2年生の部では互いに譲らぬ激しい中段突きと上段蹴りの応酬が繰り広げられ、僅差判定で宮澤楓芽（極真館さいいたま中央）が優勝。小学3年の部は中島颯飛（極真会館浜井派）が、小学校4年生の部は稲塚悠二（大成会館）が優勝を決めている。G-4 白熱の戦いは小学校5年生の部の宇佐美正（無所属）と北山輝（KSS 健生館京都）の一戦だった。昨年の全日本のG-4 小学4年生の部でも同カードによる決勝となり、その際は交流大会でも圧倒的な強さを見せていた宇佐美が優勝と思われたが、北山は宇佐美の猛攻を防ぎつつワンチャンスで上段蹴りで技ありを奪い嬉しい優勝を果たしている。

雪辱に燃える宇佐美は序盤から蹴りを主体に積極的に攻めるが、北山はこれをしっかりガード、下がることなく逆に中段突きからの膝蹴りで宇佐美に迫り、昨年以上に互角の勝負となる。白熱した試合は延長戦へもつれ込み、延長終了間際に宇佐美の左上段前蹴りが北山の顔面を捉え技ありを奪いそのまま試合終了、宇佐美が悲願の優勝を果たした。また負けた北山の決して下らない戦いぶりは大人も見習うべき気迫があり、会場からは両者へ大きな歓声が上がった。

小学校6年生の部では1回戦で相手の胴回し回転蹴りに上段蹴りを合わせるという離れ業を見せた杉山太陽（建武館）が決勝戦でも距離に応じて上段、中段突き、膝蹴りと巧みに使い分け、中盤で左上段回し蹴りで技ありを奪い優勝、来年度はG-3 中学生の部での活躍が期待される。

<G-3 中学生～女子～一般部>

G-3 は顔面と胴に防具を着用したうえで、顔面への認めたクラス。腰上への蹴りは6本以上となっている。もともとは防具なしで顔面を打ち合うG-2 未満の選手のために作られたクラスだったが、近年では中学生の部、女子部ともレベルアップし、着実にクラスとしての充実度をあげている。

中学1・2年生の部50キロ以下では、前蹴りから突きの連打で着実に攻撃を当てていった石塚宏人（ドージョーシャカリキ）が優勝。中学1・2年生の部60キロ以下では佐野天馬（龍道場）が離れて上段前蹴りと上段突き、接近して膝蹴りと追い込んでいく攻めを見せ優勝している。

女子部では女子離れした上段突きを武器に3年連続の全日本王者を目指す軍司翔香（建武館）と、交流大会で着実に力をつけている齊藤楓花（ドージョーシャカリキ）が対戦。齊藤は軍司の強打にも怯まず果敢に打ち返し場内を沸かせ試合は延長戦へ。最後は適打で及ばず軍司が見事三連覇を達成するのだが、齊藤の頑張りとそれを跳ね返した軍司の力強さには、改めて女子選手の成長ぶりが感じられた。

G-3 一般部軽重量級は、スタミナを武器に攻め続ける試合スタイルで勝ち抜いてきた古川弘樹（田中塾）が優勝。軽量級は防具の上からでも倒すパンチ力を持つ天白光平（龍道場）が一本勝ちで勝ち上がり決勝へ。決勝戦でもその強打ぶりを発揮し、試合時間僅か5秒足らずの上段突きによる一本勝ちで優勝を果たしている。軽中量級では中学生時代に優勝を果たしている橋下侑也（KSS 健生館京都）が、強打の芹澤力矢（ルタドールファイトクラブ）との打ち合い気迫で押し切り優勝している。

<G-2>

新空手の花形といえるのがこの**G-2**だ。互いに防具なしで顔面攻撃を認められた厳しいルールで行われ、腰上への蹴りも8本となっており、パンチにのみ気を取られると蹴り数が足りず減点を取られてしまう。

軽重量級では交流大会でも確実に優勝をしてきている北山魁一（KSS 健生館京都）が前蹴りからの上段突きを武器に決勝戦へ勝ち上がる。対戦相手の渡邊隆聖（ドージョーシャカリキ）も鋭い右上段を持つ好選手だが、北山の突きで鼻を出血。2度のドクターストップを経て試合終了、北山が優勝を果たした。軽量級は新空手の老舗道場・土心館の磯部由和と正道会館・高知の山田洸誓の決勝戦となった。一進一退の攻防は延長戦へ。山田の蹴りに上段突きを合わせての上段蹴りなど要所でしっかり当てていった磯部が嬉しい優勝を遂げた。

軽中量級は平塚大士（龍道場）と福田祐次（KSS 健生館福岡）の決勝戦。平塚は一回戦を僅か5秒、左上段蹴り一発で、続く準決勝を下段蹴りで一本勝ちで勝ち上がってきた強豪選手。決勝戦でも平塚は伸びのある前蹴りで距離をコントロール、下段蹴り、中段蹴り、突きと自在に攻める。そのどれもがバランスが良く強打であり、打ち終わりに崩れがないため福田も反撃の機会を見つけられずペースを持っていかれてしまう。結局、平塚攻勢のまま試合終了、トーナメントを振り返っても完勝で優勝を果たした。中量級決勝戦は堀大樹（勇心館）と小松幸粋（ボスジム）の一戦。新空手常連選手の堀は長い手足を生かしたロングからの攻撃が特徴。対する小松は鋭い左右のワンツースを主体に、駆け込んでの右上段突きなど突き主体の選手。堀と

しては突きを捌いて攻撃を当てたいところだが、小松の踏み込みが鋭く凌げきれない。迎えた試合終盤、小松の右上段突きに捕まり技ありを奪われ、なんとか立ち上がるが、続く右上段突きに倒れ、小松が見事な一本勝ちで優勝を決めている。

最後の試合無差別級決勝戦は中村俊雄（無所属）と一回戦を一本勝ちで勝ち上がってきた山下力也（道真会館）の顔合わせ。決定打はないものの手数で中村優位で進んだ試合終盤、山下が右上段突きで中村をグラつかせ、そのまま追い込んで左上段で一本勝ち。最後の試合を一打逆転の勝利で決め場内を沸かせた。

<エキシビション>

各クラス決勝戦前には K-1 ヘビー級で活躍した掘啓選手と田尻祐介選手、そして K-1MAX、Krush で活躍する元新空手王者・山本優弥選手と ISKA 世界スーパーバンタム級王者の寺戸伸近選手が対戦。堀×田尻組は重量級ならではの打ち合いで田尻選手が鼻血を出すガチの内容。

続いて行われた山本×寺戸組は、1R 目はまず山本選手の強烈なミット打ちを披露、場内にプロならではの鋭いミット音が響き渡る。2R ではいよいよ山本 VS 寺戸が実現。山本選手の重く早いミドルと寺戸選手の鋭いパンチが交錯するエキシビションとは思えない緊迫した内容。ラスト 20 秒は両者足を止めてのド迫力の打ち合いを披露！寺戸選手の鋭いパンチが山本選手のカードを抜けて顎にかすり、思わず膝をつきダウンが宣せられるほどの打ち合いのなかゴング。集まった観客に「これぞプロ！」の技術と気迫を見せつけた。終了後のマイクでは「自分は久保坂代表の全日本での活躍を見て新空手に参加して、新空手で成長してプロになりました」と山本選手が話すと、寺戸選手も「新空手は本当にレベルが高く気持ちのいい選手が多いです」とコメントした。